

日本におけるマラリアの対処と治療に関する研究

○牧 純¹, 菅野 裕子¹, 西岡 茉莉¹, 村田 安紀奈¹, 今泉 駿吾¹, 秋山 伸二²,
西岡 麗奈¹, 関谷 洋志¹, 難波 弘行², 玉井 栄治¹(¹松山大薬感染症学,²松山大
薬臨床薬学)

【緒言・方法】2006年度新設の松山大学薬学部医療薬学科(6年制)の第1期・2期の学生たちは配属された各研究室で、実験または文献調査による卒業研究に取り組んでいる。感染症学研究室での彼らの幾つかの研究テーマに「日本における感染症の過去・現在・未来」がある。その1つがこの表題に示された研究で、当該の学生らには文献調査と研究室セミナーでの発表・質疑応答の徹底化が図られる。今回の発表で、マラリアの「過去」の部分は特に11世紀初頭の『源氏物語』の時代におけるマラリアの対処方法に焦点を当てるが、「現在」のマラリア、特にその治療薬にも論及する。【結果・考察】文献資料によると、日本本土に古代から20世紀後半に至るまで土着のマラリアが存続していた。現在は輸入マラリアが問題となる。平安時代、「瘧(おこり)」と呼ばれたマラリアと考えられる病が出てくる『源氏物語』(若紫の巻)は写実的とはいえ、基本は虚構の世界なので史料としては限界がある。そこで、ほぼ同じ時代の記録性の高い藤原道長の『御堂関白記』に関する先人の研究を適宜比較対応させた。両者に共通して「瘧(おこり)」の対処を加持祈祷に頼るところが興味深い。現代の医学・薬学の標準的テキスト等に見られるマラリアの臨床・医薬などに関しての記載も進行中である。医学と薬学は「迷信・信心の時代」に始まり、「経験の時代」を経て「科学・化学の現代」に至ったと考えられる。しかし、日本におけるマラリア治療に経験的に有効とされる薬の時代があったか否かは不明で今後の研究対象である。【謝辞】本研究に貴重な助言を賜っている松山大学の増野仁教授(中国文学)、郡司良夫教授(図書館学)に衷心より深謝致します。